

日本兵の沖縄戦記

「夢も結ばず」 下

前回(7月号)からの続きです。米軍の上陸前空襲、艦砲射撃をうけ、長尾さんたち要塞建築第6中隊(第6中隊)は北部へ移動しながら、米軍にも遭遇、戦闘状態に入ります。首里の第32軍司令部が南部へ撤退を決めた5月22日以降、長尾さんたちはやんばるの各地を転々としています。

【恩納岳での戦闘終結】

5月22日には「今日ばかりは九死に一生を得る」という危機的な状況に追い込まれました。大雨をしのぐために住民の家に入れてもらった際、「今日ほど敵と近近遭ったことは初めて」と表現する「3間」(約6m)くらいの距離まで米軍が接近し、危うく銃撃をうけるところでした。この日は第32軍が南部撤退を決めた日でもあり、戦争がさらに長期化していくことになるのですが、長尾さんたちは知る由もありませんでした。

5月23日から米軍の攻撃が激しくなり、食糧調達もままならなくなります。「一日の量約3勺」(約45g、ご飯茶碗の3分の1)では空腹を満たすことなどできず「目がまいそう(ママ)」になります。この窮状の中「傷兵の小屋作り二棟分の仕上」も「体の力が無く作業もできない」状況に陥りました。

6月1日、米軍の攻撃はさらに激しさを増し、恩納岳への米軍の猛攻はじまると、長尾さんたち中隊は全員後退し、この夜地区司令官(特設第一連隊長青柳時香大佐だと思われます)はじめ隊員は「全部下がって父志山(ママ。久志岳)」に向かおうとします。恩納岳に本部を置いていた第二護郷隊が撤退するのがこの時期で、ほぼ同時に長尾さんたちも移動することになります。しかし長尾さんの部隊は大人数で移動するリスクを回避するために分散し、国頭ではなく「恩納の部落」に移動します。



恩納岳と恩納集落

伊江島に突破することを決意します。

7月1日、やつのことで舟をだし、「舟が思う様に進行せず名護港の入り口から本部の近く」に近づき、翌日上陸した後、本部から今帰仁の山中に入りました。「今夜ほど命がけで来た事は初めてである」との記述からは、米軍に見つかるかもしれない、舟が沈没するかもしれないという極度の不安と緊張の中で、何とか辿り着いたことがうかがえます。その後しばらくして羽地、三原から移動し、東村有銘にも一時退避します。そこでは、「わが潜水艦が来て敵の船を大分やつている」(8月9日)などという日本軍優勢の情報を得る一方、「情況はよくない」という記述がさらに増えてきます。8月27日には「8月15日付をもって日本が降伏したとか宣伝ビラを飛行機より撒く」と書かれてありますが、このことについての

【舟で命がけの脱出】

長尾さんたち一団は恩納岳を抜け、「イモ掘り」「ウナギ取り」などで食糧を確保しながら恩納、石川、屋嘉の各所を点々と移動します。この頃になるとさらに長尾さんの体力が落ち込み「近頃どうも体が気力なくだるく体がぐらぐらする」(6月24日)、「体力がゼロに成って仕末った」(6月25日)という状況に陥ります。また「島尻方面の戦局は22日を以て玉碎した」という話を聞き、「我々もどうなる事か」という不安を覚える中、幸運にも谷茶の浜で舟を見つけ、